

前更不可憚、受禪<sup>○安</sup>之後者、可用吉日也、

〔見聞雜錄 二十三〕文久二年十二月廿一日夜、小十人格和學講談所附塙次郎、加藤一周<sup>加藤氏之隱居ニ而、番町</sup>邊住宅<sup>之由、</sup>同道いたし、駿河臺邊より<sup>一説に、駿河臺中坊陽之助カヨリ歸リニ云</sup>歸宅之途中、三番町堀田攝津守構へに於

て、何者共不知四人程にて、右兩人を及切害、其上日本橋御高札場、麴町三丁目横丁、湯島天神等<sup>江</sup>捨札を建候由、

逆賊安藤對馬守同腹いたし、前田健助一同、恐多くもいはれざる舊記を取調候段、不届至極に付、三番町に於て天誅を加へる者也、

前田健助は歌學に名高く、先年浪人に而、和歌之宗匠成しが、御目見被仰付、下谷長者町邊住宅にて、歌名夏蔭と云、

〔嘉永明治年間錄 十一〕文久二年十二月廿二日、江戸三番町に捨札アリ、其文に曰、塙次郎、此もの儀先年逆賊安藤對馬守と同腹致し、兼々御國體は辨へながら、前田健助兩人にて、恐れ多くも無謂く舊記を取調候段、大逆の至り、依之昨夜三番町に於て天罰を加ふる者なり、

○按ズルニ、當時ノ外國奉行堀利熙ガ老中安藤信睦ニ與ヘタル書ナリトテ世ニ傳フルモノニ、米國都督米理努理留微造貴邸、專論我政務、閣下<sup>○老中安藤信睦</sup>共被同餐、尊之如師父、遂與刑典數

部是可怪一也、閣下與渠結伯仲之義、渠贈衣帛珠玉巨萬、閣下酬以慶長正保金一萬鎰、是可怪二也、渠醉倒之際、挑閣下侍婢、閣下許而與之、是可怪三也、渠固請築館于殿山、閣下遂許之、是可怪四也、此四者辱國體大者、而有甚於此者、渠聞朝廷固持異議論、廢帝之事、閣下愆愆、使國學者探舊典ナド見エタレドモ、此書ノ後人ノ僞作ナルコトハ、世既ニ定論アリ、尊攘紀事補遺ニモ、清川八郎爲詭言、劫中山忠愛曰、如聞幕吏謀逼皇上<sup>○孝</sup>讓位、不及今決事、則無復及也、ト見エタル如ク、當時ノ浪士、爲メニスル所アリテ故ラニ斯ル詭言ヲ放チ、甲唱ヘ乙和シテ、遂ニ世ニ流布スル